

# ひきこもり支援の難しさ

## ——当事者理解と支援の「ゴール」とは

いまや全国に二五万人とも言われるひきこもりは、過剰なまでに社会性を強調する現代社会が生んだ社会病理とも言える。ひきこもりを個人の問題ではなく、社会全体の問題と捉えるところから、支援のあり方や自治体、地域で何ができるのかを考えてみたい。



白梅学園大学子ども学部教授／NPO法人つながる会代表理事／認定NPO法人フリースペースたまりば 副理事長  
**長谷川 俊雄**

「ひきこもり」とは何か？

### ——同調性と協調性が強いられる社会

「ひきこもり」を考えると、思春期・青年期と社会との関連性を歴史的に捉えることが大切な視点である。江戸時代までの封建社会は士農工商の身分制度があり、職業選択の自由は保障されていなかった。江戸時代から明治時代への大展開の特徴のひとつに、身分制度の解体による職業選択の自由の誕生がある。そのことは個人の能力と競争による職業選択を意味しており、「学校から仕事へ」の仕組みを形づくっていた。明治時代は近代社会の建設のために殖産興業や富国強兵の国家的事業の実現をめざして、新たな社会や産業や文化の創造が強く求めら

から、強迫的に社会へ適用する態度の形成や、社会のあり方を問わない子どもや若者の誕生が始まった。

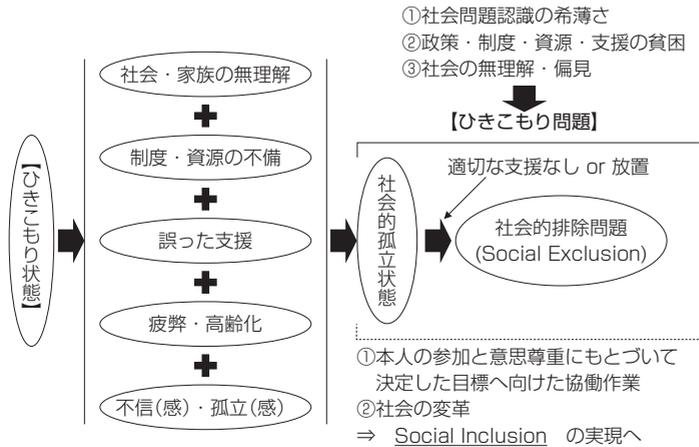
同調性と協調性の強調は、社会へ適用できない、適用したくない子どもや若者の居場所を奪うことになったと考えられる。「社会性」を発揮できない子どもや若者が、不登校やひきこもりという状態によって「安全確保」のための積極的選択と社会からの回避を意味していると捉えることもできる。最近、「苦登校」という言葉と概念が登場してきた。またそうした子どもたちが多いのではないかと指摘がある。「苦登校」とは、「社会性」を活用し学校へ適応しながらも苦悩と葛藤を手に行っている子どもたちを意味している。「社会性」に苦しんでいる子ども・若者たちが広範に潜在的に潜在的に存在していると見ることが適切だろう。

社会から逸脱している状態として「ひきこもり」を捉えるのではなく、同調性と協調性を過剰に求める緩やかさと柔らかさを失っている社会が排除した結果として、あるいはそうした社会から生命を守る行動や状態として「ひきこもり」を捉えるこ

### はせがわ・としお

一九五六年生まれ。社会福祉士、精神保健福祉士。明治学院大学大学院社会学研究科社会福祉学博士前期課程修了。横浜市役所・社会福祉職として厚生生活館・福祉事務所・保健所に勤務。精神科クリニック勤務を経て愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科准教授。二〇一〇年より現職。専門はソーシャルワーク論、子ども・若者論、家族支援論。『ひきこもりの理解と援助』(萌文社)、『ひきこもりケースの家族援助』(金剛出版)、『ひきこもりの思春期』(星和書店)など著書多数。

図1 ● 「ひきこもり状態」から「ひきこもり問題」へのプロセスの認識 (私案)



とも可能であろう。

「個人病理」としてではなく「社会病理」として、つまり「個人問題」ではなく「社会問題」として捉える視点を持つことが大切である。

れていた。そのために個々人に求められたものが「社会力」である。この力は、古いものを壊し、新しいものを創るといった「変革」を求める能力でもある。一九四五五年の終戦後の日本も、大きな変革が多方面に求められた時期であったことから「社会力」が求められていた。

しかし、高度経済成長期が終わった一九七〇年代以降、社会基盤の整備と発展、労働環境と労働条件の一定程度の改善、「一億総中流」と呼ばれた生活水準の向上と安定等の時代を迎えると、社会運動や労働運動の停滞・衰退が始まる。この「変化」の中で求められる力は「社会力」ではなく、「社会性」であった。「社会性」とは、問題の本質を問うことや変革することではなく、現在の状況に適応していく姿勢と志向性を意味している。ここ